

水害検証会議別録

④・丙・丁	大分類 F	中分類 01	委員会		
	(永)	10	5	3	1
議長	事務局長	局長補佐	調査係長	会議係長	係

【第10回】

開会	平成28年2月5日(金)午前10:00		閉会	同 午後0:11
場所	庁議室			
出席委員	①金子晃久 ②関優嗣 ③遠藤章江 ④大澤清 ⑥中村安雄 ⑦中村博美 ⑧水野昇 ⑨寺田洋 ⑩堀越道男 ⑪茂田信三			
欠席委員	中島亨一			
委員外議員	小林剛, 遠藤章江			
案件等説明のため出席した者	執行部 高杉市長 須藤市民生活部長 斎藤安全安心課長			
事務局員	齊藤事務局長, 古谷補佐, 安田係長, 倉金書記			
署名	委員長 中村安雄	担当書記 同上		
案件	○要求資料に基づく説明及び質疑			

## 開 会 10時〇〇分

○委員長 おはようございます。第10回目の検証委員会ということでございます。前回1月28日には市民生活部長、そして安全安心課長等の災害対策本部等の内容・指示等についてご説明をいただきました。そして、その後に質疑をさせていただいたということであります。大変質疑の中で避難指示が遅れたとか、伝達ミスがいくつかあったということが判明をいたしております。ホットラインの問題等についてもスマーズに伝達をされてなかつたとか、放送依頼が遅れたとか、そういうふた様なミスが判明をしております。問題は水害というような大混乱をした中で指示がされたというようなことも、そういうふたミスにつながつたのかなというふうには思いますが、いずれにしても対策本部が水害で水没したというような異常な事態になってしまったことが、最大の問題かなというふうに思います。きょうはそれらの内容が、もっときちんととした部分で説明をいただけたるについては、本部長に出席をしていただければというふうなことで、災害対策本部の本部長、市長ということになるわけですが、高杉市長にも出席をいただいたとすることでございます。とりあえず、ただいま申し上げました内容で、前回提出をいただいた対策本部の指示とか、対応についてという項目が議員の皆さんのお手元に配つてございます。これらに基づいて説明をいただいておりましたが、この説明の内容で行き違いがあつたことがいくつござります。というのは、特にですね、指示をしたにも関わらず、防災無線では放送されなかつたと。伝わらなかつたということですね。上三坂の場合なんかも、きょうおいていただいているようですが、そういう問題が発生しているようあります。指示はしたんだということが、私どもには報告はされているのが現状でございます。そういうふた行違いがあつたということが、前回の時点で確認されましたので、きょうは本部長である高杉市長にも出席をいただいたとすることでありますので、そういう今までの内容について、ただいま私申し上げたのはほんの一端であります。大変でも市長のほうから今までの反省点、そして指導に対するいろいろなご意見があつたと思ひますんで、それらに対してご挨拶と共にちょっと意見を述べていただきて、その後にこちらから質疑をさせていただくというふうな形をとらせていただきたいと思ひます。大変でもよろしくお願ひします。高杉市長のほうから発言をいただきたいと思ひます。

○高杉市長 きょうは常総市議会の中に設けられました検証委員会ということで、今回の水害をしっかりと検証した中で、次の市民の安全を守るためにどのようにしていったらいいかということを、未来へつなげる検証になる委員会ですから、我々としても執行部としても全面協力をし、わかっていること、あるいはわかっていないこと、それらすべてをきちんと話していきたいと思っております。特に今回の水害は想像を超える大規模な水害でした。正直言って我々もこれほど大きな水害になるということは、残念ながら予測できませんでした。人口6万3000の一つの自治体の中で約半数の人口、また世帯数においても半数の世帯が被害に遭うという、おそらく全国でもこれだけの大きな一つのまちが、水害の被害にあったということはなかつたと思ひます。このような大災害の中から我々がしっかりと学ぶことによって、常総市だけでは

なくて、おそらく全国の自治体、あるいは全国の市民の皆さんにこの検証結果が役立ってもらえるような、そういうものにしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひします。

○委員長 はい、どうもありがとうございます。ただいま今回の水害が大変規模の大きいもので、想像を絶するような災害になったことがご挨拶の中にございました。問題は、検証委員会でありますんで、検証を私どもはしながら、内容を確認しているということでございます。特に河川との関わり、例えば八間堀なんかもそういった一つなんですが、何で八間堀はもっと早く機場を動かして排水をしなかったのかとか。いろんな意見が出てきております。確かにそれぞれの分野で、どこのどこがだれが管理をしているんだということもあんまりわからなかつたんですよね。我々今まで。同じ八間堀、一つの川にしても一部では国交省の管理、それから江連八間の管理ということが判明したわけです。それぞれの管理者の皆さんがある程度通りきちんとした管理ができていれば、多少は水害の排水もできているわけですから、だいぶそういった面では災害、いくらかはもっと少なくて済んだのかなと、要するに、鬼怒川の流れに沿って勾配がついていますね。一番上流のほうで今回決壊していますから。当然最後は下流のほうへ決壊した水が流れて3日間にわたって、家屋に浸水してしまったということで、被害が大きくなつたということは、確かにそういったことが、排水ができていれば、そんなことはもつとなかつたのではないのかなというふうに思つたりなんかは考えられるわけですが。十分そういった管理体制が機能してなかつたことが判明してきたんですよね。だから、それらも今後大きな課題で、そういった準備だととか、そういった対応の仕方を、災害が起きるだろうということで予測していかなかつたと。それを言えば、この災害対策本部のこの庁舎もそういったことの一つだというふうになつてしまつわけありますが、いずれにしてもそのくらい、いろんな反省点がたくさん出てきたことは確かだというふうに思います。そういう意味で委員の皆さんはきょう10回目を迎えているわけですから、それぞれ今までいろんな発言をいただき協力いただいております。特にいろいろきょうは市長がですね、対策本部長が見えているわけですから、そういったことでホットラインが何でもっと早く機能しなかつたのかとかね。そういった意見もこの間出ておりますが、そういった面での発言もいただいていきたいというふうに思います。市長、今ちょっとご挨拶いただけなんですが、もっと突っ込んだ部分で、この対策本部の指示とか、対応とかって資料、私らいだいているんですよね。これらに基づいて前回は質疑をさせていただいた。ところが実際にこれとこちらのあれが、報道関係が一体的ではなかつたようなことが、この間の内容でわかつたわけですが、それらも含めて、とりあえず対策本部があつて対策本部が中心になって、この災害に対応したことだけは確かなわけですから、それらもどうしたらもっと…、水害だったから電気が来ないとか電話が来ないとか、とにかく大混乱をしたんだと思いますよね。本部そのものが、だから、そういったところの一部をもう少し細かにちょっとお話をいただければありがたいんですが。

○高杉市長 はい、わかりました。少しずつ私もお話しながら、また皆さんからも質問を受けながら答えていきたいと思うんですが、まず私のほうからお話をさせていただ

きます。まずホットラインについてお話をしたいと思います。これは下館河川事務所長、伊藤さんから私のほうに直接連絡が入ってきております。こちらに記載してあるように今回7回出されております。最初は9月9日の22時54分ですね。この内容は、特に若宮戸で非常に越水の可能性が高いという連絡が来ました。この段階ではまだ避難についての指示や勧告ということはないんですけども、その際伊藤所長からあったのは、避難についてはまず準備、準備勧告がありました。そして次に勧告、最後は指示という、この3段階に分かれますという説明を私受けました。そして、今のところはまだその段階ではありませんから、水位が徐々に上がって特に若宮戸地区で危険な状況に迫りつつあるということをまずお知らせしますということが1回目でした。2回目ですけれども、9月10日に日付が変わりまして、ここで1時23分と記載されています。これは、それ以降も急激に水位が上昇してきておりますと、ですから、まずは避難準備を発してくださいという具体的な指示が所長からありましたので、それを受けて直ちに災害対策本部の中でそのことを全員に知らせて協議をした中で、まずは避難準備を指示しましょうということで、若宮戸地区、玉地区も含めて避難準備の勧告を最初にしたということになっています。この段階はまだ準備ですね。それから3回目が、こちらに記載されているように2時06分にありました。これは、それ以降も急激に水位が上昇していくと、もはや準備の段階ではありませんということが所長から連絡が入りまして、これは指示に変えてくださいと。つまり、強制的に避難しなさいという形で出してくださいという、これも極めて具体的な内容のお話がありましたので、直ちにこれも対策本部で皆さんに報告をし、全員の確認を経た中で避難指示を発令しました。これはここに書いてあるように玉地区、それから本石下、新石下の一部ですね、こちらに今回は避難指示という形で出してきております。それから4回目ですけれども、今度は4時48分ということが記載されていますけども、やはりホットラインの中で、万が一の場合、浸水の想定区域があるから、それを送りますから、これを活用してくださいという形で連絡がありました。そして、そのファクスがこちらの安全安心課のほうに届いて来ております。それを本部の中で全職員に提示をし、こういう形で下館河川事務所のほうから浸水の想定区域地図がきましたという説明をしております。その後はいよいよ具体的に今度は浸水が始まります。越水が。これが5時58分でホットラインの中で、若宮戸地区でもう越水があったという情報も入ってきております。次のホットラインは7時11分にやはり所長から来ております。これは下流部の危険箇所から越水が予想されるという内容でした。これはもっと具体的に言いますと、当初は若宮戸、玉地区だけだったんですけども、鬼怒川の水位がかなり急激に上昇してきたために、これは若宮戸地区以外の石下地区、水海道地区も含めてです。あるいは守谷まで含めた中で、下流部での、どこで越水が起こっても不思議ではないと、そういう状況になってきたという、これも具体的な指示がありました。これも本部のほうに、全員に知らせております。これを受けて各地区ごとに、今度は市民からもいろんな情報が寄せられましたから、各地区ごとに避難の指示を出していくような内容に変わっていきます。ですから、当初は若宮戸地区の越水だけだったんですけども、この段階でその下流部、つまり常総市全体、あるいは守谷

地区も含めて非常に危険な状況になってきたよという情報が入って来たのを受けて、これは広範囲に各地区ごとに危険な箇所から、これは若宮戸以外においても避難指示を出していかなければならぬという状況にここで変わってきました。それからホットラインで、次は9月10日11時42分ですね。これは21k付近で越水、避難してくださいという連絡がありました。これは三坂地区であります。ということで、これも災害対策本部の中で協議をし、避難指示に向けて準備を始めてきたという形で、合計7回にわたってホットラインを通じた具体的で極めてリアルな明確な指示が入つて来たということをまずお知らせしたいと思います。

○堀越委員 その点ちょっと確認したい。

○委員長 はい。

○堀越委員 今の市長の発言の中で、3回目のホットラインなんですが、市のほうの説明文では、水位が上昇中、避難勧告を出してくださいなんですよ。これはほかのやつで見ると指示なんです。今市長は指示って言いましたよね。これ、指示ですよね。

○高杉市長 ですから、ホットラインで来たのは勧告という形で来たと思いませんけれども、全員の協議の中でこれは指示にしようということで、指示という形で出しました。

○堀越委員 ホットラインそのものは勧告だったけども。

○高杉市長 だったと思います。勧告という形で来たと思うんだけども、我々協議の中ではこれはもう指示だと。

○堀越委員 もうそれ以上のものだと。

○高杉市長 そうです。そのくらい緊迫していましたから、指示ということで2回目は出しました。

○堀越委員 もう一つは、そのときにいわゆる氾濫シミュレーションは、そのときに9月10日の今のホットラインの2時6分に出ているはずですよね。先ほどは4時48分って言ったんだけど。その前ですよね。河川局が出たやつの中では、9月10日2時06分に氾濫シミュレーションを送付と、こういうふうに載っているんで。この時点ではもう、だから指示の活用の仕方で、このとき4時48分の段階で、万が一の場合、浸水想定区域を活用してくださいというのが、前にあって、送付されて。

○高杉市長 私はホットラインで聞いたのはこの時間ですね。その後アクセスが送られてきて、その地図を災害対策本部のメンバーに安全安心課のほうから配ったというふうに記憶していますね。

○堀越委員 そのときみんなで共有したという話なんですね。

○高杉市長 そうです。はい。

○茂田委員 いいですか。

○委員長 はい、茂田委員。

○茂田委員 はい。市長に最初に言っておくけど、こういう想像もしない出来事だから、こういうたくさんの不手際があったというのは言い訳で、緊急対策本部というのは緊急なんだからそのためにつくるんですよ。常時つくっているのは緊急って言わないんだから、緊急だからたくさんの方集まるわけでしょ。初めてだからわからないいつ

て、これは毎回、毎回はないよな。これは言い逃れにしか聞こえないから、そういうこと言っちゃだめだよ。そうでしょ。緊急だからつくるんでしょうよ。今まで経験ないからみんなして集めて。爆弾じゃないけど今落ちて爆発したわけじゃなくて、幾日か前から想像はできたわけでしょうよ。まずそれ意識を改めなくちゃいけないよ。でかいからおれには責任ないって、だれにも聞こえるよ、そういうように。今まで経験ないから間違ったって許されるんだって、そういうことは違うよ。その能力なければ今すぐおりればいいじゃない。危機対策の本部長っていうのは、的確な指示を出して、その前にみんなから意見を聞いて、どうするっていうのは幾日かあったわけでしょうよ。まずそれ改めなきゃだめだよ。あともう一つ、ホットライン7回だけ。7回ね。来たらどういうふうに指示しているか、記録しているかっていうのを聞きたい。あと、こういう大事なことに前回初めてわかったことに、録音も録ってない。だから、もう兵隊さんが、勝手にばらばらばらやっている感じでしょうよ。議事録もない、録音もない。ただメモでやってどうのこうのという話でしょ。今までのを、この検証すると。それができないんだよ。ちゃんとファクスなら、たぶん電話かなんかで来たと思うんだよね。あのホットラインっていうのは。人間の聞くっていうのは必ず誤差もあるし思い違いもあるし、それをまず録音しなくちゃだめでしょう。録音、録ったか録らないか。それが大きな誤りだと思うよね。みんなして情報を共有しなかったというの問題だよね。ただ聞いてどういう形でみんな意見出した。それ聞いてくれますか。

○委員長 はい。今2点の質疑がありましたから、その辺だけひとつお答えください。

○高杉市長 1点目はどういう。

○委員長 2日間にわたって全く記録がなかったというような話が、この前の時点でも出ているんですよね。だから、記録がないということは問題だらうと。事が事だからということだと思うんですが。そういう面でお答えいただければと思いますね。

○高杉市長 これはもう既に決まりがありまして、記録については秘書課と総務と安全安心課で録るということになってはいました。既に決まってはいるんですね、こういう場合には。ただ、それができなかつたという。

○委員長 はい、わかりました。それはそういったことが現実だということですね。

○市長 そうです。はい。

○委員長 あとは1点目の話ですよね。要するに責任の転嫁だとなんかということでは通らないだらうというようなことは、当然役職の立場では全権、責任は重大だというふうなことの話が今出ましたよね。

○高杉市長 もちろん責任転嫁ということは全然…。

○茂田委員 今後一切言うなってということだよ。想像つかなかつたとか、そういうこと言っちゃだめだよ。指揮官は。そのために集まっているんだから。

○委員長 現実的にはやっぱり具体的なことは、なってみて初めて想像以上のことが起きたとか、そういうことはあると思いますから。これはだれもが考えても、その思ったようにだけはなってないと思いますよ。自然の驚異ですから、これは。

○茂田委員 そのために前もって集まっているんでしょうよ。あともう一つ、それは

もう肝に銘じてもらうから、答えてくれとは思わないし、それだけしかね…答えてくれって言ってないでしようよ。それよりホットラインで来たのをどのように記録、電話じや、あやふやでしようよ。録音するとか電話をね、再生するとか。どういう方法を取ったか。

○委員長 じゃあ、そこだけ答えてください。

○高杉市長 ホットラインで入った内容については、先ほど言いましたように、できるだけ正確に全員に災害対策本部の中で私のほうから伝えてあります。

○茂田委員 言っていることは違うんだよ。いいですか、委員長。

○委員長 はい。

○茂田委員 例えば、電話が鳴るよね。「はいはい、わかりました、そうですか、そうですね」それじや聞いた人が1人しかいないだろうってことなんだよ。おれ言っているのは。そうでしょ。これ電話聞いて、「はい、高杉です、市長です。」って、さつき河川局から電話あったと言って、それ聞いてているのは1人しかいないんだよ。だから、大きくしてボイスっていうか、拡声器みたいになるよね。そういうふうにしてみんなに聞いてもらうか、電話今再生できるから、それで再生して聞くとかじゃないと聞き間違ったら、間違って伝えることでしょうよ。ああいう混乱状態で1人の記憶なんか曖昧だよ。だから、それ。

○委員長 私は市長のほうにいろいろお答えいただきたいということだったんですが、今度は質疑にちょっと早変わりしていますから、質疑になってきましたから、質疑ということで今度認めています。そうしますと、それに対してのお答えを一つ一ついただきたいというふうに思います。今最終的な意見として、今の内容的なことを答弁してやってください。

○高杉市長 今の点については、確かに録音なり拡声するなりしなかつたので、今後反省していくたいと思います。

○委員長 はい、わかりました。そういったことでね。はい、どうぞ中村博美委員。

○中村委員 7つのホットラインの中の一番聞きたいのは、7時11分の6個目ですか、6個目のホットライン。前回の検証委員会で部長と私から意見が出たんですけど、ここには私は対策本部の中に入っていて、こういうホットラインがありましたというのを市長から対策本部で発言されたのは、私は記憶していないと言うと須藤部長も僕もちょっと記憶にはございませんってはっきりおっしゃったんですけど、これを皆さんに正確に全員に伝えていると言ったこととは全く違うんですけど、7時11分のホットラインはどんなふうに伝えたか、自分で記憶していることをお話しください。

○高杉市長 ですから、このときはですね、下流部の危険箇所から越水が予想されますということですから、今まででは若宮戸、あるいは玉地区に限定された中での情報でしたから、それ以外の地区からも越水が予想されるということを報告しました。

○中村委員 されるで終わっちゃったんですか。若宮戸なんかは前日からあったもので、朝早くから指示を出していて、最終的にはここでどうして上三坂の越水が予想されるところに避難指示を出さなかつたんですか。若宮戸ではしっかり避難指示を出して、越水前には全員が避難したことを消防団と市の職員で全部調べたということを部

長から聞いたんですよね。越水前に避難指示出して避難しているのをしつかり調べた。なのに、ここには何も出さなかつたって。7時11分、最低でもここで出してほしかった。これはどんなふうに考えたんですか。これ、きょうは一番市長に聞きたいことなの。

○高杉市長 若宮戸については明確に、例えば何時何分に準備勧告を出してくださいという形で指示が来ました。連絡が。次の時間に、今度は避難準備ではなくて避難勧告という形で出してくださいという具体的な指示がありました。それに基づいて準備をし、準備勧告を出し、そして避難指示を出してきたわけです。この7時11分のホットラインの内容というのは、どこどこの地区内で具体的に準備勧告を出してくれとか、あるいは具体的に避難勧告というのではありませんから。これは下流部の危険な箇所、これはいくつもあったと思われますけども、それで予想されるということですから、その内容は下館河川事務所長の指示というのは極めて具体的で明確ですから、必要があれば必ず準備勧告を出してください、あるいは避難勧告をしてくださいと、しかも、どこどこ地区にということで来ますので、これとは違う形で来ています。

○中村委員 坂手地区に避難勧告を出すよう指示が出たので、こちらのほうに出したっていう記録あるでしょ。このときに何で全部に出さなかつたんですか。

○高杉市長 8時のことですよね。これ言っているのは、坂手地区。避難勧告ですね。これは国交省のほうからの指示がありまして、国交省のほうから連絡が入って、坂手地区に避難勧告を出してほしいということで、国交省から本部のほうに連絡が来ております。それを受けた坂手地区、それから菅生地区、内守谷地区に避難勧告を出していったということになります。

○中村委員 はい、（「はい」との声）国交省から言われたからしかできなくて、対策本部の中では何も考えてなかつたんですか。じゃあ。そういうふうに考えてしまうけど、どう思いますか。そのことについて。市長。

○高杉市長 我々の情報というのは、一つは河川事務所および国交省から来ます。それともう一つは、各地区からも情報が上がってきます。それを総合的に判断して、避難準備なり避難指示を出していきますから、それらを総合的に全体の中で協議した上で、例えば坂手地区に避難勧告を出そうということを決めてくわけですから、その情報源となるものは、当然下館河川事務所、あるいは国交省、あるいは市民からの情報、あるいは消防団からの情報なんかも総合的に判断していく中で、どこどこの地区に勧告を出す、指示を出すということで決定してるわけですから。

○委員長 こういったことが実態だということあります、本来でいきますともうこの辺まで、7時11分のホットラインの下8時あたりになってきますと、もう全体どこもここも一体的な事態に発展する可能性があったということだけは間違いないですね。この辺はね。だから、坂手のほうまでということは、東側はまさに危険は下館河川事務所が指示しているような内容であったわけですから。これはもう今までないくらいの水位の大水が実際だったということありますからね。そういうことがあったわけですね。はい、遠藤委員。

○遠藤委員 私、市長がやはり最初に大規模な水害で予測できなかつたというお答え

をされたことに対して、少し質問なり意見をさせていただこうと思うんですけども、やはり予測ということは想像力だと思うんですね。市長のトップの想像力。この想像力がいかにどんなものであるかによって、この災害が大きくなつた、小さくなかったということも変わってくると思うんですね。それでやはり危機管理の最大のポイントというのは、やはり悲観的に準備をして楽観的に行動すると。これが危機管理の最大のポイントだと思うんですね。そういうところで予測できなかつたということは尊い市民の命がなくなられた、こういう状況であるトップの判断としては、私は少し不足しているのかなという気はするんですね。ですから、やはり発言は慎重になさつたほうがいいと思いますし、予測できなかつたということは、やはり私たち市民としては市長の信頼に関わることですんで、これは慎んでいただきたいというふうに思います。そういう中で質問していきたいんですけども。

○高杉市長 ちょっと待ってください。私、予測できなかつたんじやなくて、予測を遙かに超えるということを言ったんです。

○茂田委員 同じだろうよ。

○遠藤委員 その中で先ほど中村委員からも質問があつたんですけども、前回市民生活部長に対して検証委員会を開かせていただいて、いろいろ質問しているんですけども、市民生活部長の答弁では、市長に来たホットラインというものを、災害対策本部で当初の頃共有されていなかつたというような答弁だったんですね。それと今市長がおっしゃったこととは真逆のことであるわけなんです。市長は、すべてホットラインは1回目から7回目まですべて災害対策本部の中で情報を共有していると。こういうお話でした。先ほど茂田委員からあったように電話は個人一人で聞いているから、本当に伝言ゲームになるわけですね、そこからは。市長から職員に対するね。そうなると情報の信頼性というのは、本当に不確かなものになると。これは確実に言えることだと思うんですね。ですから、今後はハンズフリーにするなりテレビ電話にするなり、そういう設備をしっかりと揃えなきゃならない。対策本部の中でね。これは改善点の一つであるんですけども、まず確認したいのは、市民生活部長の答弁、いただいた検証の結果と市長が今おっしゃった検証の結果が食い違つていると。これはどういうことなのかなっていうこと。まず1点質問します。

○高杉市長 市民生活部長がどういうふうに言われたかはわかりませんけれども、あくまでもホットラインの内容については、当然災害対策本部に報告をしますし、その中で協議をしないと、例えば若宮戸地区に避難準備を最初に出していくんですけども、その準備にしても準備でいいかどうかということも当然議論していきますから。例えば私がいきなり言うんではなくて、議論の結果としてこの地区に、例えば玉地区全域に避難準備をまず出そうということを決定していきますから。そこで討議をした中で決定をし、その結果をホワイトボードに記載します。そしてホワイトボードに記載したのをもう一度私が読み上げて確認をして、それで防災行政無線につなげていくというやり方でしたから、それはきちんと言つてあります。

○遠藤委員 そういった中で一つまたご質問させていただきたいんですけども、実は国土交通省のほうの発表では、決壊の11時間前の9月10日午前2時過ぎに関東地

方整備局ですか、下館の河川局ですか、常総市に対して氾濫が起きた場合に浸水がどのように広がるか、シミュレーションを情報を提供していたという、こういう話があるんですね。これは報道による話です。そうすると、実際市長がおっしゃられた、今の検証の結果だと4時48分にそういう内容の報告がファクスとともにあったと。そうすると、時間差にして2時間以上あるわけですね。そうすると、地震とか一気に起こる災害じゃなくて、今回の水害の場合というのは、ほんとに1時間2時間浸水する時間が遅かったら、浸水に対して備えができたら、家庭内の被害というのは未然に防げたわけですね。ある程度。ですから、この1時間2時間のずれというのは、非常に大きいということをご自身で理解されて質問に答えてほしいんです。ですから、報道によると、国交省の関東地方局が常総市に、もし三坂付近が決壊したら市役所も水没しまうよという、こういうファクスを確かに送っているはずなんですね。シミュレーション。これを送っているはずです。ですから、それが2時過ぎに届いたのか、4時48分に届いたのか、これはちょっと報道と食い違いがあるんですよ。だからそれはどっちなんですか。

○委員長 ただいまの質問ですが、どちらが正しいんですか、これは。

○須藤市民生活部長 シミュレーションは、若宮戸が越水したときのシミュレーションです。

○委員長 あつ、若宮戸が越水したときの。

○堀越委員 あの2時6分は。

○委員長 うん、2時6分。これ若宮戸。

○堀越委員 そうすると、4時48分は。それ違うの。

○須藤市民生活部長 これはそのシミュレーションを活用してくださいということなので…。

○委員長 シミュレーションが送って来られたんだな、それは。そうじゃないんですか。

○高杉市長 その時点では、三坂のことではなくて、若宮戸のことで送って来ていると私は思います。

○遠藤委員 これ若宮戸が決壊したということで報告されているんですよ。2時6分に。そこで21kのところ、三坂のところもバツをつけてあって、こういうメモ書きがあるの。左岸20.25kが決壊した場合のシミュレーション。つまり21kじゃなくて20.25kの三坂。三坂が決壊した場合は、市役所も含めて水没しますよっていうシミュレーションなんですよ。左全体が。ですから、さっき私が言ったのは、ここで想像力を働かせなきやならないわけですよ。2時の段階で、災害対策本部は、この時点で。自分たちでいる災害対策も含めて常総市全市内が水没すると、機能を失うんだよっていう想像力を働かせて、そこから対策をしていかなきやならない。これが災害対策本部の仕事だったと思うんですけども。それはいかがですか。わざわざ赤字でメモ書きまでしてよこしてる、これ。三坂が決壊した場合どうなるか。

○委員長 それは災害本部に入っているんだな。これ、わからないの。これは。今示されたのは。これはだって災害対策本部に入ったやつ、遠藤さん…。遠藤委員、それ

は入手したんでしょ。

○遠藤委員 これは国土交通省の関東地方整備局の発表内容。それとあとは10月18日の読売新聞の記事にも載っていますから、これはおそらく取材をして、午前2時過ぎに常総市が水没するということ、浸水ということに関して情報を流してはいるふうに書いてあるんですね。そうすると、その時点では当然三坂の決壊も予測しなくてはならないし、自分たちの災害対策本部が水没することも心配しなきやならない。だから、さっき言ったのは予測というのは想像力であると言ったんです。

○委員長 下流に水が必ず流れて来ることは間違いないからな。その辺は大変重要な部分だよね、それはね。内容的にもね。

○高杉市長 部長も私のほうも、若宮戸のところが決壊したときのシミュレーションしか見ていない。

○委員長 遠藤委員が言ったものについては、わかつてないということだね。

○須藤市民生活部長 今安全安心課長が確認していますが、遠藤議員のそれはいつの時点のなんでしょう。

○遠藤委員 9月10日の12時50分という資料です。記者発表資料と書いてあります。（「決壊した時か」との声）

○高杉市長 ですから、この4時48分の…。

○委員長 災害対策本部はそれがわからないんだ。

○高杉市長 見てないです。

○委員長 これは一番大事な部分だ。

○高杉市長 入って来てなかつたです。我々には。

○堀越委員 いいですか。

○委員長 堀越委員

○堀越委員 それといつも問題になるのが、このハザードマップとの関係なんですけど、ハザードマップの我々もらったやつ、第一番目には、鬼怒川の想定条件というのをね、これはこの地図には、現在の整備状況で鬼怒川が氾濫した場合の浸水地域と浸水の深さが示してあります。対象としている大雨の規模は3日間の総雨量が402ミリで100年に1回程度発生すると考えられていますというやつで作られている。こういう前提にあるわけですね。今回800降っているんです。全体でね。もっと降っているんですよね。こここの鬼怒川の下も含めるとね。こうなると、このハザードマップとそれと今のシミュレーションの問題では指摘されるんだけども、このように降ったと。市役所のところは1メーターから2メーター、水が来るとなっていますよね。このハザードマップもシミュレーションと同時に本来的には掲げておかなければいけないものだったんじゃないかなというふうに思うんですが、この使い方については新聞報道でもあるけども、故意に抜けていたのか、利用しようという気がなかったのか、あっても目に入らなかったのか、そこらのところはどうですかね。この洪水ハザードマップの使い方。

○委員長 どうですか、その辺は。

○高杉市長 ですから、ハザードマップについては、例えばここで言うと4時48分

までの段階では検討はしてないです。

○遠藤委員 委員長、もう再度確認。

○委員長 はい。

○遠藤委員 この地図は見ましたか、市長。これ、ご自身で見ました。見てないんですか、これ。

○高杉市長 上三坂のやつですね。

○遠藤委員 ええ。

○高杉市長 見てないですね。

○遠藤委員 4時の段階では、こういうものは送られてきてないんですか。4時48分の段階で浸水地域があるから活用してくださいってことで、ファクスに連絡があったという地図は。どういう地図なんですか。

○委員長 資料はどうですか。災害対策本部。今のこの12時からの資料、今提示されましたが、これは災害対策本部には入手されてないんだ。

○斎藤安全安心課長 災害対策本部というか、安全安心課には今言った鬼怒川左岸の25.25kという若宮戸溢水のシミュレーションは送られてきている記録はあるんですけども、今遠藤さんが言わされたそんなやつはないです。ただ、決壊したときに私が国交省に電話して、決壊の後なんですけども、同じようにこういうシミュレーションをいただきたいという話をしたときに、これはホームページにあるんでそっちを見てくれという回答は出ました。それは決壊した後の話です。

○委員長 決壊後ですと、12時過ぎってことだね。1時頃。

○斎藤安全安心課長 その前に安全安心課にそういうのが来ているという記録はないです。

○遠藤委員 そうすると、国交省が出している情報というのは、食い違いますよね。国土交通省は決壊の11時間前の9月10日の午前2時過ぎに常総市に対し、氾濫が起きた場合に浸水がどう広がるかシミュレーション、想定実験情報を提供していたっていうふうに答えています。

○斎藤安全安心課長 2時過ぎに来たのは、この今言った若宮戸の氾濫。これは見ています。情報共有しているので、これは見ております。

○委員長 三坂のないんだ。これは。どういうことなんだろうね。

○遠藤委員 それはどういう結果になっているんですか。若宮戸が決壊した場合はどういう結果になっていますか。

○斎藤安全安心課長 若宮戸が溢水した後は、12時間後に旧水海道の市街のほうまで…。

○委員長 浸水すると。

○遠藤委員 こここのところ読んでください。若宮戸のとき、どういうふうな浸水状況というふうに判断したのか。ちょっと教えてください。

○須藤市民生活部長 2時の時間帯に送ってきたシミュレーションは何枚もございます。時間で1時間後、2時間後というような形で、3, 4, 5というような形で。

○委員長 それは下館から送ってきたやつですか。

○須藤市民生活部長 そうです。2時のとき。最大浸水図というのがございます。これが先ほど課長が言った、市役所の近くまで来るだろうというような。最大。これが若宮戸が…。

○委員長 若宮戸のやつだね、それはね。

○遠藤委員 ですから。いいですか。

○委員長 はい、遠藤さん。

○遠藤委員 つまり2時6分の段階で、水が石下地区を通過して水海道の市内まで来るということは2時6分の中で想像できたでしょう。じゃあ。できたでしょう。そんなによく書いてあるんだったら。夜中の2時に三坂浸水しますよって言ってくれれば、もっともっとタンスでも畳でも上に上げられたでしょう。そういうことですよ、私言っているのは。想像力を働かせれば、被害者も亡くなる方もいなかつたかも知れないし、家屋が浸水したとしても、家財道具ぐらい2階に上げるぐらいの余裕もあったかも知れないし。

○委員長 かなり時間ありますよ。ここからするとね。

○遠藤委員 やはり亡くなった方がいるということを、ほんとに肝に銘じてもらいたいですよ。1人亡くなろうが1000人亡くなろうが、亡くなった方がいる災害ということは変わりないですからね。そういうことをどのように考えているのか。ほんとに真剣にこの検証委員会の質問に答えていただきたい。

○委員長 今回災害によって死亡者が出ておったということは明らかですが、その前に2時頃にこの内容がそういったことで、旧水海道のほうまで水が入って行きますよいうことが、その中で情報が得られているとすれば、やっぱりそれは三坂のほうの前ですからね。若宮戸ですから。上流でさえそういったことが言わされているわけですから。これは内容的にその辺でもはつきりしていたということですね。越水してきた水が水海道まで入って行くよということが、示されているわけですから。それは本来であればもっと早い時間に、そういった報道をすることができたんだからね。そこまで指示がされているわけですから。そういうふうに思いますね。はい。

○寺田委員 ただ、氾濫シミュレーションはたぶんマックスで入っていると思うんですよ。どの地区もそうなんですね。だから、今回はその氾濫シミュレーションのマックスまではいってないんですよ。だから、氾濫シミュレーションどおりには水は来でないんで、ここまで行くっていうのはマックスの氾濫シミュレーションなんで、それでだから、行政の擁護するようじゃないですが。まあ。

○委員長 そのとおりではないという予想なんだ。

○遠藤委員 委員長ね、だから私さっき言ったでしょうよ。悲観的に準備するんですよ、すべては。マックスで。要するに水が少しだったらよかったです、なんだよ。2階まで来ますよと言って10センチしか来なければ、よかったです、で終わるんですよ。災害っていうのはそういうものですよ。何かちょっとおかしいな、考え方。

○茂田委員 いいですか、委員長。

○委員長 はい。

○茂田委員 何か話を聞いていると、全部国交省のあれしかできなくて、自分らで決め

ることできないの。まず耳と情報というか、必ず地元の職員も来ている。そういう判断はできないの。あんたら聞いていると。みんな国交省の指示で。じゃあ、対策本部必要ないでしょ。国交省が直接流してもらえば終わりでしょ。何人集まっているんだか知らないで、雁首揃えて、あなたたちはそういう判断できないの。今やりとりずっと聞いたら、国交省の資料とそれしか指示出せないの。さっき言った400が800になって、だれだってわかるでしょ。ハザードマップは400で計算しているっていうんでしょ。800なら倍だもん。マックスもピンポイントもないよ、そんなの。マックスでやったって400の800じゃ、2倍でしょ。そういうのが判断できないの、まず。それ聞いてくれる。言ってくれますか。

○高杉市長 ですから、先ほども言いましたように、災害対策本部の情報源は国交省からだけではありません。これはね。市民からの情報も入ってきております。この地区で越水する可能性があるという情報も入ってきております。消防からも入ってきております。ですから、それらを総合的に判断した中で、当然準備そして指示を出していくわですから、これは災害対策本部の中で、例えば準備あるいは指示を出すときにおいても、全員で討議をします。その中でいろんな意見も出ます。ですから、国交省の言うことだけで判断しているのではありません。当然地元の情報や市民からの情報、消防からの情報。それで消防団も既に土のう積みに各箇所で行っていますから、その情報も入ってきてます。ですから、それらを判断した中で、例えば坂手地区あるいは水海道の豊水橋の南地区にも出しておりますし、あるいは大輪、羽生地区にも出しておりますし、向石下にも出していくという中ですから、これらの情報は別に国交省から来たわけではありませんから、市民からの情報に基づいて、例えば羽生、大輪地区にも避難指示を出したし、向石下にも出しておりますから。これは国交省から来ていても市民からの情報や消防団からの情報も含めて、元町のところもそうですが、きちんと避難指示を出しているということになっております。情報源は一つや二つではありません。

○茂田委員 はい、委員長。

○委員長 はい。

○茂田委員 そもそも、まず土のうというのは、あれは小川が水漏ったとか、そういうのには有効だよ。いつも思うけど、土のうなんか効くわけがないでしょ。まず土のうやったら死んじやうよ。氾濫のとき決壟のとき。そういう地元からの情報があったならば、もっと違う結論が出るはずでしょ。それだけ情報あったならば。私の言っていること、全然取り入れてないということでしょう。それだけ情報あれば、消防団、地元から、まず土のうより、逃げろとか大事なもの上げろとかと、それが先決でしょ。土のう積みしたって、あれは小川のちょうどの水しか止まるわけがないでしょ。2メートルも水かさが行って、土のうっていうのは気休めだよ。こういうときは。気休めならないでしょ。土のう積みに行ったって、何回も職員行っているけど、そういうのはこういうときには通用しないことなんだよ。

○委員長 茂田委員。いずれにしても、消防が行動したこと、土のうは何箇所もそのような形を取っているんだよ。意味があったとこもあるんですよ。全部がだめだ

っていう意味じゃないですよ。

○高杉市長 ちょっといいですか、委員長。

○委員長 はい。

○高杉市長 今の件なんですけども、消防団は独自で懸命に水害を救おうとして、それぞれの地区で懸命に土のう積みをやりました。私は、これは、効果はあったと思います。それは否定できません。ただ、我々が言っているのは、土のう積みをしている消防団のほうからの連絡が来たということ。私のほうで土のうを積めなんて指示はしていません。ですから、そういう方からの情報も入ってきました。その上で避難指示を地区ごとに出していくといったということです。

○茂田委員 土のう、土のうと言うけど、それは対策本部とはまず仕事が違うことでしょうよ。

○高杉市長 だから、それは我々で土のうを積めという指示はしていません。

○茂田委員 私の言わんとすることわからないの。そういうふうになっていれば、もっと違う指示が出るはずだろうっていうことを言いたいんだよ。そういう情報が集まっているなら。盛んに土のう、土のうといつも言うけど、土のうは万能薬じやないよ、あれ。土のうなんか2メートル効くわけがないでしょう。そういう情報があったなら、違う情報が、もう危機に迫って情報が出せるはずだろうと言っているんだよ、おれは。

○委員長 だからね、土のうについては私が答える話じやないにしても、消防団とすれば、やっぱり地域の人の要望があれば、それらに答えるためにも、何箇所もそういう場所積んであるんだよ。確かにね。だから、それは市長が答えている内容は、消防団はということですが、消防団がやっていることを、いやそれは本部からそれはだめだよっていう話じやないです。

○茂田委員 盛んに土のう、土のうと言っているけど、これだけ2メートルにもなっちゃって、だめなのがわかっているだろうって言うんだよ。

○委員長 はい、中村委員。

○中村委員 茂田委員からも遠藤委員からもあって、当初の挨拶でというのがありましたけど、ほんとに同感ですよね。こんな大きな水害になるとは思っていなかったと。これ言っちゃいけない、ほんとに。私、だから一般質問で一番最初に言いましたよね。ずっと対策本部に越水前からいたから。あの状況を見ていたら、こんなことになってるなんてって、対策本部自体が未曾有の災害みたいですね、みたいな感じで最初から軽かったって、私は一般質問でも言いましたよね。対策本部の体制が。だから、落ち着いて記録も取れない。こんな状態になっちゃっても、ほんとは、記録は秘書課と総務課と安全安心課で取るべきでしたけど、取っていませんって平気で答えられるっていうか、こういう体制が不思議で仕方がない。それでホットラインが2時6分の大問題、それが2時6分は若宮戸だけだったということで、若宮戸には完全に越水前に、さつきも言いましたけど、避難が終了していたことを確認していた。ここではそういう上三坂やまちの中には出すつもりは何もなかったということね。これは確認ね。今度4時48分では浸水の想定区域図を活用してくださいって、下館河川事務所、ここでも私は出してほしかった。上三坂含めてまちの中。これも出なかつた。さつき言つ

た7時11分のホットライン、部長も私もここに現場にいたけれども緊迫感も何もない。もう下流部でも危険箇所から越水する予想がありますから皆さんっていう声なんか記憶ないと言ったら、部長も、僕も記憶ありません。こんなのがないでしょう。記憶ないって。言ってないってこと。ここでも3回目に出してほしかった。上三坂からまちに。それも出なかった。今度は大変なことですよ。この前、10時15分には上三坂、中三坂上、中三坂下地区に避難指示を指示しましたって、部長、これ指示したんですよね。指示したにも関わらず出なかった。

○委員長 放送されなかつたんだよね。指示はされたんだけど、放送はされてなかつたと。

○中村委員 そうそう。放送されたのは、10時31分に出たのは中三坂上、中三坂下地区に避難指示が出されましたっていうふうに言って、部長、これは訂正しないって言ったよね。10時15分に上三坂、中三坂上下に避難指示を出すように、市は指示しましたということね。部長はこう答えたんだけど、市長これどう。指示したんですか。指示したのに言わなかつたのはどこですかって、私一般質問でも市長に、一般質問したとき答えてほしかつたんだよね。「答えられません」だよ。一般質問で答えられない。

○委員長 これはね、前回の聞き取りのときにこういった形でもって指示をしたにも関わらず、放送はされてなかつたというようなことになつたわけですよね。これはやっぱり大きい指示ミスですよね。ということだと思いますが。

○高杉市長 今の点ですよね、10時15分ですよね。こちらの記録では上三坂、中三坂上、中三坂下に避難指示と書いてあります。災害対策本部としては当然どこの地区に出すかということについては、全員で協議をして決めます。そして、その決まった経過は必ずボードに記載をします。ボードに記載をした後にもう一度確認をします。そして防災無線のほうで流すような形になっていきますから。その中ではホワイトボードに記載されておりまますので、確認はしているということです。

○委員長 流されて当たり前のものが、流されてなかつたということだよね。

○中村委員 すいません。じゃあ、確認ね。ボードに記載するときには、私が書いた紙というのも、それはどこに行ったかそんなのは調べようがないから、言っても仕方ないよと言われるけど、上三坂の区長からもうすぐ越えるんだよっていう電話があつた。それで私はもうすぐ越えるんですよと言って、上三坂と中三坂上と中三坂下に出してくださいって、マジックで手のひら台の大きさの紙に書いて、それはボードにそのまま写されたということでいいんですね。ボードから指示がなく、依頼書を書かないでやつたんですか、依頼書を書いたんですか。ここ教えてください。依頼書、書いたの。書いたんだよね、これ。ここで依頼書には中三坂上、中三坂下地区に避難指示が発令されましたっていう、あるでしょ。このどこかの時点で、どうしてボードのものがここに誤って書かれるの。これは今遠藤委員が言ってくれました、1名の命に関わることですからね。2名。2名の命に関わること。市長、これ答えてください。ボードには書いてあって、この指示書にはなぜ書かなかつたのかは、調べてくれなかつたんですね。わからない、わからないですとわからない。この前の検証委員会もわ

からない。何で。

○高杉市長 だから、そこは一番大事な点ですから、全体の中で確認をし、ホワイトボードにも記載をし、それで防災行政無線のほうに流すような形で言ったわけだけども、結果として落ちちゃったわけですよね。抜け落ちた。そこはきちんと調べるようにしていますけれども、残念ながらどこの段階でどういう形で抜けたかというのは、わかりません。

○委員長 わからない。

○中村委員 ボードから指示書に書くときに抜けたんでしょ。

○高杉市長 それはわからない。どこの段階、それはわからない。

○中村委員 どこの段階って。そしたら、私が一般質問でも言ったように、これはわからなかつたら市長の責任です。私言いましたよね。そしたら、市長は僕の責任だし、現場でも5日後に現場の皆さんに来てくださいって言われてから行つたんだからね。現場にはね。そのときに現場の皆さんに言われたよね。命1名亡くなつたのは市の責任だからって、そのときもお詫びしましたよね。これも詫びたというふうに確認しているよね。詫びたんですよ。これだけもう一回はつきりと僕の責任で詫びましたって、ここで言って。

○高杉市長 僕の責任で詫びましたとか、そういう個人の問題ではなくて、災害対策本部として、ですよ。災害対策本部として、結果として出せなかつたわけですから、それは本部の責任であり、本部の最高責任は私ですからということで…。

○委員長 はい、金子委員。

○金子委員 はい。いろいろ抜け落ちていたとか、なぜ東部全域に出さなかつたという、皆さんの反省点あると思うんですが、私はなぜそこになつてしまつたのかっていうのをもう一度ちょっと繰り返ししたいと思うんですけど。博美議員と遠藤さんからホットラインの共有に関しまして、前回の検証委員会では部長のほうからホットラインの情報に対して、私ども質問したと思うんですが、ちゃんと共有は対策本部全体でなされてゐたのかという質問に対しては、部長はその点に関しましては曖昧ですと、ちゃんと共有されていたかどうかわかりませんというような。先ほど遠藤さんからも同様な質問を市長にされたかと思うんですが、これ部長にお聞きしたいんですが、今市長が対策本部の全員に共有し、全員の協議で決定をしたというふうな形でおつしやっていますよね。ということは、それが行われたのでしたら、当然須藤部長もよくご記憶にあると思うんですが、その辺の前回のご答弁の食い違い、今回との食い違いというものをわかりやすくご説明をお願いしたいと思います。

○委員長 はい、須藤部長。

○須藤市民生活部長 ホットラインは先ほど市長が申し上げましたように、河川事務所長から市長の携帯に入ります。それは市長が受けます。その後、市長が答えたように、伝えたんだと思います。（「思うじやだめだよ」との声）

○金子委員 それは全員で共有していたんですよね。

○須藤市民生活部長 ええ。ですけど、私は、いくつかはわかりませんけど、抜け落ちたのもあるということです。私のほうの体制というか、聞き漏らしというか、状況

がいろいろでしたので、完全に全部聞いたかというと聞いていないというふうに前回はお答えしました。

○金子委員 全部聞いていたか聞いてないか、そういう混乱状況というのはわかる部分はあるんですが、この市長がさっきおっしゃった7回のホットラインを全員に示して全員で協議して、ましてや市民生活部長は災害時の筆頭部長ですよね、それが抜け落ちてた、7回あったかどうかがわからないというのは、市長がおっしゃるような全員で協議をしたというのとは全く違うと、皆さんそう思っているとは思うんですが。思いますよね。そこを明確に説明してください。市長の全員で共有したというのは、これは一部違う面はあるということなのか。ということは、すべてのいろいろなホットラインを情報共有ができるからこそ、いろいろな今後に起こるような、抜けてしまった、鬼怒川東部に出すべきものを、もし正常な皆さんで協議しているのならば出せていたかも知れない。その情報伝達というものが抜け落ちていたのでしたら、市長のおっしゃっていること違うわけじゃないですか。そういう正常な判断ができた可能性を、翻ったときにちゃんとホットラインやすべての情報が対策本部内で市長を筆頭に出されてちゃんと協議されていたのかということを、ホットラインを一例にとつてご説明いただきたいと思います。

○委員長 いや、すべてに対して振り返って全部記憶はないかもわからないが、今言われている部分は大変大事なことでね。皆さんで協議をした結果、ホットラインの内容を協議して…。

○金子委員 協議したのなら正常な判断が全員でできていたかも知れないし。そこをお願いします。

○委員長 どうですか、部長。そこは。

○須藤市民生活部長 会議も部長10名おります。本部員が。通常こういうふうに座っているわけなんですが、こういう状態でこういう環境でいけば共有はできたと思います。記憶が定かでないんですが、そういう場ばっかりではなかったために、聞き漏らしたのかなと私は思います。

○金子委員 わかりました。じゃあ、市長、全員で協議しましたと、その情報を全員に共有して全員で協議しましたという点は、これは全員でやった。

○高杉市長 はい、「それは間違いないか」との声) 本部会議の中で、もしかするとそのときですよ、一人か二人ですよ、連絡に行ってたり、それはわからないけども、本部会議の中で全員がいる前できちんと協議をして、そして準備勧告にしろ、避難指示にしろ、何回も出していますからね。かなりな数。それは共有をし、ホワイトボードに記載をし、確認をした中で当然ホットラインのことも全部共有をして、中でしか勧告も準備も出せませんから。それは出してきました。

○金子委員 わかりました。じゃあ、結論づけたいのは、一つは市長のご認識、その情報共有のご認識と、情報共有の現実に差があるということで私たちは理解します。これが一つの検証の結果だと思います。もう一点、そういうようないろいろな情報共有であったり、いろいろな今後起こってくる抜け落ちだつたりという部分に対して、これは中村博美議員からも先ほどありましたような、本部長として責任を取るだとか、

あと謝罪するだとか、そのほかに、それ以上にこの前の12月の定例会議のときに小林議員はこうおっしゃっています。このような避難指示が抜け落ちた部分に対して家財だったり、人命が失われてしまったときには、市長これは責任ですよね、そして謝罪ですよね、そのほかに突き詰めていけば補償ですよね、最後。というふうにおっしゃいましたよね。それに対して小林議員の質問の答弁として、まさにそのようになると思いますというふうに市長はおっしゃいました。じゃあ、今後その補償という部分に関して具体的なものが、もう4ヶ月以上経っていますので、その議会からも1ヶ月くらい経っていますので、その補償の内容を具体的にお示しいただければと思います。

○高杉市長 補償については、これは市のほうで今國の制度を活用してできる形ではやっているけれども、その別な形での補償ということについては、そう簡単には…、つまり原因について、単に常総市だけではなくて、あくまで國の管轄している部分もあるわけですし、それから県が管轄している部分もあるわけだから、補償となるとそう簡単に、具体的に市だけが単独で何がやれるかというのはちょっと今の段階では。これはそう簡単に。

○金子委員 最後にすいません。それに関しましては、市長が避難指示を出す最高責任者は市長だと。それに対して、出せなかつた部分に対しては、責任もあり謝罪もありその次にくるのは補償だよねといったときに、市長はおっしゃるとおりですというふうなことに断定をそのときにしておりますので、それは対策本部、すなわち市長として個人として国とは別として、市長個人の行政、市としての補償の仕方、県とか国とかっていうのは、ある意味一つ補償等に関しては、認識としてはですよ、もしかしたらこれで補償のものに対してはひとつなされたというふうに考えていたとしたら、もし市のほうでそういうような市民に対して、議会の場では補償をしますというような言い方だったわけじゃないですか。小林議員の質問として。だから、市のほうとしての補償のあり方を当然そこで市長が認めたということは、市のほうとして国とか県によらずにその補償をすると言ったことに対する回答をぜひお聞かせいただければと思います。

○委員長 じゃあ、できる範囲内で答弁してください。

○高杉市長 補償ということに関しては、市が今の段階で単独でやるやらないも含めて、これは軽々に言うことはできないと思います。

○金子委員 その議論はあったんですか。だって、議会で皆さんに市民に言ったっていうことですからね、あのときに。

○委員長 過去に小林議員からの質問に対して、そういう答弁があつたということなんで、繰り返し今金子議員がそのような内容を申し上げているわけですね。

○金子委員 そこは明確にして後で示してください。これは要望です。

○高杉市長 今の段階で市が単独で、どこの部分についてどういう補償ができるということはまだ言えないです。

○金子委員 それじゃなかったらあの答弁は、私は詭弁ではなかつたかと断定づけるしかないと思いますよ。

○委員長 1時間15分経ってますんで、暫時休憩をします。10分間ですね。25分に再開しますから、その時点までよろしくお願ひします。

休 憩 11時14分

再 開 11時22分

○委員長 いろいろ議論がされました。内容等について、やはり委員のほうからは納得がいかない部分がたくさんあったみたいな内容でありますんで、今までのことできつた金子議員から責任問題とか金銭的な補償の問題とか、そういう面での話が最終的に出てまいりましたが、それらに対して完全な形でお答えすることはなかなか難しいというようなお答えが市長の本部長から話がありました。ほかにちょっとやり取りの中でのお答えがありましたら、ひとつ発言してくださいよ。非常に難しい発言であります。

○高杉市長 特に付け加えることは、私のほうではありません。

○委員長 ああ、そうですか。はい。水野委員。

○水野委員 はい。私は鬼怒川の西地区なもんですから、はつきり申し上げますけども、本来であれば今検証委員会でいろいろ皆さんのお見も聞かせてもらっていますし、私も実際被災された方たちのところも60軒は歩いて来ましたが、そういう中で感じたこと、この検証委員会を通してね、こういう予測できないような水害でしたから、やむを得ない点も多々あるというふうには私は思っていますけども、しかしながら、議会としての対応も一つもなされてなかつたんですよね。一つ例にすれば、私の地元というか近くでは、若宮戸、そして鬼怒川の向石下地区も越水されたと。我全然わからなかつたんです。当日、異常な天候だったんで、雨の量も違ったもんですから、鬼怒川の新大橋を渡ったときに、水海道市役所に来るのに、これは普通じゃないと。私もこの歳になって、こういう水位が上昇したのは見たことがない。これは危ないと思って来て、役所に来たときに寺田さんとか坂巻さんとかみんな行き会って、こういうところ見てくれよって言われて歩き始ましたんですよ。そのときにもう既に豊水橋のところも越水しているような状態だったんですよね。これでは私のほうも決壊しちゃうから、勘弁してくれと。きょう見て歩くのは。それで帰らせてもらって、向こう、西地区をまわって事務所へ帰って10分ぐらいで、防災で今度は三坂地区が決壊しましたと電話があったんですね。その間いろいろとそっちこっちでみんな知り合いが全部いますんで、電話したりして心配していたんですけども、私はこの検証委員会を通して考えたことは、執行部の今後あってはならない問題ですけども、今後のためには執行部を正していくのも一つの要因でありますけども、議会としても何か私はこれ感じたのは、やるところがあったんじゃないかと。議会からも当然執行権者と議長も相談していただいて、議会の、越水しなかったという手も、たくさんいたわけですよね。だから。そういう人たちをお金かけてもらえば、方法はいくらか足しになること、そしてまた越水して今度災害処理に当たっても、いろいろな問題もあったと思うんですよ。総合して考えたとき。ところが何の話もなかつたんですよ。私は議長にも座長である

中村さんにも電話をしました。私ら一生懸命やっていると。一生懸命やっているというのは私たちもわかっていたんですが。でもやっぱり、長たるべき、議会と（…聞き取り不能…）の中で、管理者なり議長なり、みんなそういう先輩らがいるところで声がかけられないとどこへ出たらいいのかわからないですよね。何をやらせて、指令も何もなくちゃね。そういうこともありましたんで、そこらまで検証の結果もあわせてトータル的にはまとめてもらえばありがたい。そうじゃないと、今後あってはならないんですが、またどういう機会にこういう災害が。可能性は無きにしも非ず、ですから。私はあわせてこういう検証委員会の結果を踏まえて、多く語らなかつたんですが、当事者、被害者になっている人もたくさんおりますんで、一番その人たちが把握しているわけですから。災害については。私は多く語らないようにしたんですが、そういうことを感じますんで、皆さんの意見を聞きながら感じたもんですから、最後に時間もないと座長からありましたんで、自らの、議会としての対応もあわせて検証結果の中にちゃんと入れていただきたいということをお願いして私の意見とします。

○委員長 はい、大変ありがとうございます。今回災害対策本部と合同対策本部、これは各関係者、市議会も議長が合同対策本部のほうには加入しております。あとは国交省ですとか、消防団とか広域消防とか警察、自衛隊、県ですね、それから防災科学技術研究所とかN P O、こういった各層の人が合同対策本部には入っておりますね。こちらの意見は大変貴重な意見が出てきたと思いますよね。こちらはね。この災害対策本部と2つのこういった本部が形成されているんですが、これはどのような形を取っていたんですか。対策本部と合同対策本部との会の内容というのはどういった形を取っていたんですか。

○高杉市長 当初は市の職員だけでの災害対策本部だったですけれども、翌日から刻々と自衛隊の方もいらっしゃった。それから警察の方も入って来られましたし、県からも来られましたし、国交省からも参加してきましたので、どんどんその方たちも入れながら災害対策本部を全体で意見交換するような形になってきました。それぞれの部隊が自己完結型の組織ですから。例えば、自衛隊は自分の判断で自分の経験の中から既に動いておりました。我々自衛隊に出動を要請したのは8時半ですから、かなり早かったと思います。ですから、かなり自衛隊は自衛隊として自己完結型の行動をしておりましたから、絶えず我々災害対策本部の中で行っていたことは、それぞれ自衛隊の中から、きょうはこういう活動がありましたという報告と、それからあしたはこういう活動をしますという予定の確認は毎日取っていました。例えば、警察であればきょうはこういう活動をします、あるいは今までこういう活動をしてきた結果はこうですとかいうのは、それぞれの消防なり国交省なりから逐一報告をしていただいております。ですから、自衛隊の人命救済ですよね、例えばヘリコプターによって何人救済したとか、あるいはボートによって何名の方を救済したとか、そういう情報は毎日それぞれの組織から聞かせていただいて情報は共有しておりました。

○委員長 特に当市で当初、20何名かが行方不明になって数字が上げられてきましたね。最終的には死亡2名という形であったわけですが、これはやっぱり情報が得られなかつたためにそういう数字の誤認がされたということなんですね。その20何

名ということの数字が出ちゃったでしょ。不明者がね。20何名まるで死亡でもしちゃったみたいに思われたりなんかして、行方不明にでもなっているように皆さんはきっと考えられたんじやないかというふうに思うんですが。その辺も大変重大な話題ですよね。

○高杉市長 実は行方不明者については、最終的に15名ということで数日間動いていたんですけども、それが行方不明者の全員の安否が明らかになったのは、確か9月15日だったと思います。その間つまり9月10日から15日までの間というのは、行方不明者の定義がきちんとされてなかったという部分があるわけですね。例えば、連絡を取っても連絡がつかない。あるいは今まで避難所にいた方がいなくなっちゃつたよとか。そういう情報も含めた中での行方不明者という、かなり広い概念でやっておりました。それについては常総市でもその名簿は独自に持っていました。それから県のほうも県のほうで独自に名簿を持っておりましたから、それを毎日突き合わせながら確認作業をしていきました。

○委員長 最終的にはどちらがその確認の数字を捉えたんですか。最後は2名だったということの数字は。

○高杉市長 行方不明者については最初からその2名というのは、亡くなった方ですから、これは入っておりません。それと別に行方がわからないという形で15名という人数が数日間続いたわけです。

○委員長 捜索していたんでしょ。その人たちのことを。

○高杉市長 はい。懸命に捜索をした結果、最終的にはその15名について全員の安否の確認が取れたということで9月15日の日に発表がなされました。

○委員長 他の市町村にお願いしておった方、結構そちらのほうで被災して困っていた人も、他の市のほうへ行っている人がかなりおりましたよね。今回はね。つくば市のほうへ行ったり、つくばみらいのほうへ行ったりね。

○茂田委員 委員長、今のことですけど、委員長と今やり取りやってもあれだから、どうして名前を出さなかつたっていうことなんだよ、問題は。誰々さん、誰々さんが連絡取れませんから最寄りのところに連絡してくださいって言えば、一発で取れたらうよ。名前出さないために自衛隊の三千何百人だつけ、毎日こうやつたんでしょうよ。あれ、名前わかつていればそうやらなくて違う活動できたでしょうよ。何で名前まず出さなかつたの。

○委員長 個人情報ですか。何かそういう。

○茂田委員 個人情報も何も。

○高杉市長 その点は、実は災害対策本部の中でも非常に議論をされましたけれども、これは市単独で出すわけにはいきませんから、県や警察と連携を取りながら確認が取れるまでは個人名は出さないということに。

○茂田委員 飛行機事故でも何でもこういう方が連絡取れませんからって、みんな出でしようよ。個人情報も何も警察はそういうこと言ってないと思うよ、俺は。だから、そういう考えであったならば、行方不明者を発表する前に警察から連絡あるでしようよ。こういう方いましたって。あんたわからなかつたじゃない。抜き打ちで発表

されたんだよ、あれは。おれらが議会やっているときに。新聞記者教えてくれたんだから、私に。付き合っている方。今県警でこういう発表になったって。あんた知らなかつたじゃない。言っていることとやっていること、全然違うじゃないの。ああいう無駄な労力を使わないために、誰々さん、誰々さんがいませんから、いたらご連絡してくださいって、1日でわかっちゃうでしょうよ。それは個人情報でも何でもないよ。そのために自衛隊の何千何百っていうのが違うほう向かったんだから。そんな馬鹿な話通用しないよ。

○委員長 名前が出てこの人たちが行方不明なんだけど、どちらかに保護されているとか、何かありましたらという連絡くださいよということが言えればもっと早かつたかも知れないですね。確かにね。その辺どうなんですかね。

○高杉市長 そういう考えはもちろんありますし、ただ…。

○委員長 あっても実行しなかった。

○高杉市長 そうじゃなくて、市単独で出すわけにはいかない…。

○委員長 いかないんだ。

○茂田委員 ないよ、そんなことないよ。

○高杉市長 ほかの機関、要するに災害対策本部というのは市単独でつくっているわけではありませんから、全体の確認の中で、それは名前を出さないということで。

○委員長 それはできないと。

○茂田委員 あなたの言うのを額面どおりとったならば、何で警察の発表のとき、あんた知らないの。それは全部つじつまあわないのでしょう。あんた言っていること。共有しているんだつたら、こういうわけで見つかったからといって、抜き打ちでなんか発表しないよ。あんた全然知らなかつたでしょうよ。おれ、新聞記者に聞いたんだから。市では誰も知らないんだよ。言っていることとあんた整合性ないだろよ。

○高杉市長 いいですか、委員長。

○委員長 はい、はい。

○高杉市長 15日の日は議会の本会議中だったんですね。予算の審議が終わって出てきたところで、私はそのことを聞きました。

○茂田委員 いいか。おれはちゃんと覚えているんだからね。会議のとき、もう発表あつたんだよ。新聞記者の方が私に教えてくれたの。そんな嘘つくなよ。タイムにしたってもう時間相当経つてからなんだよ。そういうあんた嘘ついちゃだめだよ。もし本会議で抜けられなくとも、前、議会で言ったように、部下に必ず連絡行くはずでしようよ。そして、こうやってメモで15人全部居所、安否わかりましたって出すでしようよ。知らなかつたでしょうよ。私たちのほうがあんたより早いんだよ、知っているの。

○委員長 まあ、それは本部ですから、こちらはね。ここが一番にわからなきや。立場上。

○高杉市長 県が発表したときは、私は本会議中で議会の中にいたので、その議会が閉会をして出たときにその情報は聞きました。

○茂田委員 あれは何分か過ぎてからの話なの。そんな馬鹿な話あるかよ。

○委員長 はい、金子君。

○金子委員 はい。今回の中村委員長から非常に重要なご指摘をいただいたと思っています。それは、こういうふうな自衛隊も、茂田さんもおっしゃったように動員されて捜索活動にあたって結局15名から2名になったと。その辺の、市長がおっしゃっていたような様々な関係各署、警察、消防、自衛隊、県だとかいろいろなものに対して、いろいろ皆さん集まって協議をしたというふうなことをおっしゃっていましたが、初め非常に私もここにいろいろ感じていたのが、災害対策本部と合同対策本部と二つ書かれていると思うんですが、最初災害対策本部だけの決定やいろいろな意思決定だったり、情報が先ほども申しましたように、いろんな関係各署に対してなされていないという指摘が皆さんからあったと思うんですよ。その中で、いろんなそれに対して不具合があるとおもうんですけど、ことその15名の行方不明者に限るとこの部分に対しては発表だったり、いろいろな、私たち、その市のほうだけじゃできないというふうなものに対しては、じゃあこれをもうちょっと県とか警察とかいろんな各署の人たちと協議をしてた場合に、もっと速やかに適切な方法を導き出せたんじゃないかという一つ疑問があると思うんですが、それに関しては市の中でそういう判断をしちゃって、ほかの人たちに意見を求めてあったんでしょうか。

○高杉市長 行方不明者の15名ということは、3日間くらい同じ数字だったと思うんですね。その間常総市で見に行っている15名の名簿あります。それから、県や警察で持っている名簿あります。毎日確認なり突き合わせなり、連絡は取っておりました。しかし、公表するということに関しては、公表しないという方針で一貫していました。

○金子委員 一つはすり合わせがしっかりと行われたんだけど、ある日突然15日にズドンと。

○高杉市長 いや、ある日突然じゃなくて、もちろん毎日その確認連絡は詳細に取つておりました。

○金子委員 そうすると、詳細に連絡を取つて、ある日ズドンではないとしたら、それを15人からどんどん低減をしていっていたことも、市長というのは、それは知つていたということですね。今の話で、毎日すり合わせして。

○高杉市長 もちろんそうです。

○金子委員 それを出さなかつたというのは、どういうことだったんですか。15人の行方不明者、名前出さないけどいきなりこう減ってしまった。でも、その内部では明らかにその2人に近づいていった。

○高杉市長 2人じゃないですよ。最終的には0ですから。

○金子委員 ああ、はいはい。それに近づいていったけど、それを、発表を止めていたというのはどういうことなんですか。それは県だったり警察だったり何かの関係の中でこれは止めましょうとかいうのか、それとも市の判断だったのか。

○高杉市長 いや、だからそれは市が単独で判断したわけではありません。関係機関と毎日のようにすり合わせをし、連絡を取り、公表するかどうかも含めて議論を重ねた中で、公表はしないという形できたということです。市単独で決定したわけではあ

りません。

○金子委員 はい。それは15人であったのをどんどん数は減っていったのは把握をされていたんですね。されていた。それをなぜ発表はしなかったんですか。

○高杉市長 ですから、その発表の時期も含めて市単独でそれをやるということにはならないということになったんで。

○金子委員 ここで一つの検証としては、何千人も自衛隊を導入して、その15名の捜索に必死に当たっていたと。いろいろな関係各署に対して、尽力をしてもらって、ご迷惑をかけていて、それに対して一気にそういうふうな15人から0に、そのタイミングを見計らっていたというふうにおっしゃいますが、その判断というのは、いろんな人たちがその15人のためにやってもらったわけじゃないですか。地元も含めて、中村博美議員だっていろんな人に電話をしてきて。そのタイミングというものは今考えたときにどう考えますか。それは、私たちはもし少なくなっていたのであれば発表すべきだったと考えるのですが。

○高杉市長 金子さんね、ずっと15名だったわけではありませんから。もちろん中にはふえているという情報も途中ではありました。途中では。ですから、捜索というのはまた別ですから、もしかすると15名以外にもいるかもわからないわけですから、人命についてはね。ですから、人命については徹底的にこれはやりました。自衛隊にしろ、消防にしろ、警察にしろ。それは15名の名簿に拘束されずに、例えば水の中に浸かってる方がいるかもわからないという前提で懸命に捜索はやりました。また、15名の名簿の発表とはまたちょっと違うと思います。

○金子委員 それはわかります。ただ、じゃあ最後に。その15人というものを3日間くらい、その内容は増減、増はちょっとだと思うんですけど、減があったとしても、その、持っていて最終的に15から0に発表をしたということに対しては、これは正しい判断だったと市長は考えますか。中間であってもよかつたと我々は考えるんですが、一気にそこでドンと0にしたという判断。その発表方法、発表の過程は適切だったと思いますか。

○高杉市長 それはなかなか難しいと思います。これがベストであったかどうかは。

○金子委員 いや、ご本人、ご本人。

○高杉市長 私は何とも言えない。

○金子委員 以上でございます。

○委員長 はい、わかりました。じゃあ、堀越委員。

○堀越委員 今回いろいろ避難所巡ったときも、一番に問題言われたのは、うちのばあちゃんどこへ行っちゃったんだという話なんだよね。自衛隊に取り上げられてどこかへ行くわけだ。病院とかね。それはこの家族には全然連絡がないんですよ。というのは、今回そういうように、行くとこ行くとこで、はっきり言って情報の不足、その名前についても例えばそういう災害のときにみんなが必死になってやっているときに名前を発表しちゃ、個人情報保護法だというふうに決断にいたる経過、それよりはやはり発表したほうがもっと話は進むだろう、それから不安も収まるだろうというようになるのが普通だと思うんですが。一番そこが混乱したんだと思うんだよね。だから

ら、最初から発表しなさいよと私は言っていたんですね。そのほうが見つかりやすいと。みんな声かけられる。というふうに言ったんだけども、それが最後まで個人情報と。ただその一言なんですかね。その状況の中の全体の動きの中で考えたわけじゃないくて。

○委員長 名前出せない理由ね。

○堀越委員 そう。そこなんですよ。まだちょっと納得できない。

○高杉市長 だから、当然堀越さんが言う意見もわかりますし、そういう議論もしました。我々も。ですから、逆に公表したほうがすぐに判明できるだろうという意見もありました。しかし、それも含めて最終的には、我々単独では判断できませんでしたから、当然関係機関と協議をする中で今回は、今回はですよ。<聞き取り不能>それがよかつたかどうかについては、私自身は非常に…<聞き取り不能>。

○委員長 結果的にはそれは一番よくないでしょうよね。名前が出れば、だってそれは意外と探しやすいですからね。だれだかわからない人を探しているというのは、こちらのほうがむしろ探しにくいですよね。

○茂田委員 飛行機だって全部出るだろうよ。搭乗者名簿。

○委員長 非常事態であれば当然そういったことが普通だというふうに思うんだけどね。だから、それは単独ではできなかつたということですからね。その辺だよね、問題は。その辺重要ですが、あとはボランティアが3万5000人以上も今回の市の災害に対して力を注いでくれたということですね。最初は1日に3000人もの人が駆けつけてくれたと。それが今度は適切な配置ができなかつたようですね。手配ができないですね。おそらくどこへあなたは行ってください、どんな仕事やってくださいということそのものが難しかつたような話ちょっと聞いています。その辺はどうだったんですかね。

○高杉市長 結果としては、私は非常に適正配分ができたと。今。ただ、当初は一番難しかつたのは、必要なところに必要な方たちをどうやって、まあ全体のコーディネーターですよ、ですからそういう専門のボランティアの方もいるわけです。実は各所で経験をした全体を仕切る方がね、その方に入つてもらってからは、非常に円滑にボランティアのさばきはできるようになりました。当初は確かに難しかつたです。

○委員長 でもね、3万5000人の人がこんなに真剣に、私はライオンズクラブなんかもかなり遠くから来てやつてくれていますが、炊き出しだとか何かやつてくれていますが、こんなにまで、しかも被災地に対して強力な力を注いでくれるということは、私は最初考えられないですね。かなり遠方から無報酬で、しかも何の手当もなくそういう仕事に携わってくれるわけですからね。これは私たちすれば大変大きな借りができたなというふうに思つてはいる、ライオンズクラブではそういうふうに考えるほかないですね。市としてもおそらくボランティアなくして、この復興できなかつたでしょうね。こんな形でもつて何から何まで一番やりたくないような仕事まで、考えられない若い世代の人が取り組んでくれているということが、目の前で見せつけられていますからね。そういうことが今回の復旧復興につながつてきているわけですから、これらに対してはどういった、最初の手配の問題から含めましてどうで

すか。

○高杉市長 私は今回の水害からの人命救助、あるいは復旧に当たって大変よかったです。二つあると思います。一つは今中村委員さんがおっしゃったようにボランティアの方たちが全国から集まっていましたし、そのボランティアの方たちが非常に親身になって、極めて効率よく動いてくれた。これは一番大きかったと思います。このボランティアの方たちなくして、今までの復旧はないというふうに言いきつてもいいくらいすばらしい活動をしてくれました。これについては、私は大変よかったです。もう一点は、人命の救済という点について、例えば資料で9月10日から12日までの3日間に限定しても、これは自衛隊あるいは警察、消防も含めて3日間で1339名の方をヘリコプターに乗って救済しているんですね。これは極めてすばらしい的確な行動だったと思います。たった3日間で1339名の方をそれぞれの自衛隊の皆さん、警察の皆さん、消防の皆さんのがヘリコプターで救済をしております。また、10日間に限って言いますと、ボートで救済した方が2919名いらっしゃいます。合わせると、なんと9月10日から9月19日までの10日間に限っても、最初の10日間、4258名の命を救っているわけですね。これは、非常に私はすばらしい動きをしていただいたと思って、心から感謝をしております。これ意外とまだ明らかにされてないんですけども、今回の水害からの救済に当たって、このボランティアの方たちの果たした役割と、それぞれの団体が果たした、この4258名の命を最初の10日間で救ってくれた。これは非常に感謝しております。この二つの点はなんとか検証委員会の中でも、よかったですとしてぜひ残していただきたいと思います。

○茂田委員 委員長、ボランティアも非常に大事なことだからね。きのうも若い市役所の職員に言われたの。下妻の。ボランティアの方も一部そういう方耳にしたんですけど、どうして市の職員が残業で140万出るのかと。市役所の職員もね。それはあなたのあが悪いんだよ。これ災害法だから、寝ているときまで高額な残業代払う必要もないし、選挙のときだって、たぶん無償ではあれだけど、選挙のときも1日泊まって1万とか。何で災害法の網かけないで残業代、法外な金額でしょうよ。給料のほかに140万ももらって。ボランティアの方、無料で来て、当然交通費、油やって、一緒に仕事をして市の職員が140万ってどう考えたっておかしいよ。何でその災害法で1日いくらとかまず決めなかったの。それちょっと聞かさせてもらいたい。この次こういうことあっても、まず上場会社の社員が工場のところで、例えば大震災で東北行って、当然無給だよ、自分の会社なんだから。その社員っていうのは、工場がだれになれば生産能力落ちる、販売能力落ちて給料減るんだよ。自分の職場で残業して140万なんて、これは到底考えられない金額だよ。何でそれ対策できなかつたか。

○委員長 公務員としての支払いがなされたわけですが、それらに対しての適正さがないんだろうと、ちょっと問題があるだろうというような今意見が出たんですが。それは当然支払をした立場ですから、言ってください。

○高杉市長 まず皆さんにぜひ知りたいんですけども、私は今回の水害からの救済復旧に当たって、市の職員の皆さんには本当によくやてくれたと思います。自らも被災した方もたくさんいらっしゃいます。それにも関わらず、市民のために、

本当に昼夜を惜しまず懸命に仕事をしてくれたことには、私は本当に心から感謝しております。ですから、職員の皆さんは、私は懸命に働いてくれたと思っておりますので。それから、職員の皆さんはボランティアとしても活動してくれています。例えば農地のごみ拾い。これは私も含めて、ボランティアとして市の職員も大勢参加しております。ですから、市の職員はボランティアとしても活動している。そのこともぜひ確認していただきたいと思います。最後の茂田委員からの質問ですが、私は職員が労働をしているという時間とボランティアの方の、ボランティアというのはやはり質が違うと思います。ですから、それを同じ議論でしてしまうと、時間外手当というのは、これは労基法にきちんと記載されている義務ですからね。これはきちんと果たしたいきたい。ですから、ボランティアの方たち、確かに評価しますし、ありがとうございます。しかし、残念ながらボランティアと職員としての労働は、これは質が違うという点はやはり明確に言っておきたいし、その時間外については、やはりこれは労基法に照らしてもきちんと払わなければならないというふうに私は考えております。

○茂田委員 委員長、私ちゃんと言つておくからね。当然働いて、職員は無給でやれとか思わないよ。常識の線があるだろうっていうんだ。選挙のときもそれ式やつたら相当な金額でしょうよ。ちゃんと災害法やれば残業のあれ決まるはずだよね。仮に、140万の残業を時間でやつたらその人は死んじゃうよ。

○委員長 これ、140万っていうのは給与と…。

○茂田委員 給与と別だよ。残業代。

○委員長 超過勤務手当っていうのが。

○茂田委員 ああ、そうそう。そういうのまずありえないでしょって言っているんだよ。頭変えなよ。おれ市民の方聞いて、職員が仕事やってないなんて言つてないよ。頑張っているのはわかるよ。まず140万の残業なんか、もしやつたら、1日80時間くらい仕事やらないと普通の会社じゃならないよ。常識で考えて、常識人なら同じあれだから常識で話そよ。屁理屈いいから。

○委員長 一応ね、答弁は答弁で、一応ここで終わりにしてください。今意見は意見としてそういった意見が出たということでござります。はい、もうそろそろ…、にしたいんですが。はい、遠藤委員。

○遠藤委員 休憩前の話の続きをやりたいんですよね。三坂の中三坂、中三坂上と下に避難を出して上三坂に避難指示を出さなかつたっていう点で、もう一回、これは人命に関わっていることなんで、先ほど金子議員が言ったのは、市の補償にも関わってくるという重要なことなので、事実関係を確認したいと思うんですけども。まず、ホワイトボードに上三坂と書いてあったから、上三坂には避難指示を出しましたよというふうな、ずっと一貫した答弁だったんですよね。それで、その上三坂というものをホワイトボードに書いたのは、いつだったかっていうのがやっぱり問題になってくると思うんです。逆に言うと本当に避難指示を出したときに、直にボードに上三坂って書いたのかっていうことも問題になってくると思う。私は逆に疑って、やはり上三坂に指示を出し忘れたんじゃないかなっていうふうに疑ったわけなんですね。その最大の理由っていうのは、実際防災無線でも抜け落ちていた。もう一つ、ツイッターの中で

も抜け落ちている。ツイッターでも。これはツイッターの画面をコピーしてあるので、後で見たいということであればお見せできますけども。当日の災害対策本部の中には私ずっと午前2時半過ぎからいましたけども、市長はそこに座ってらっしゃった。ツイッターを打つ方がちょうどここにいたんですよね。ホワイトボードはそこにあった。それで災害対策本部の会議の内容を聞いて、避難指示をどこに出すかメモをして、無線の人にもわす。しかし、ツイッターの場合は、この会議の内容を聞きながらツイートしているわけですよ。ここの場面で。そのツイートしている内容からも、実は上三坂が落ちているんですよ。ツイッターの内容から。そうすると、防災無線に流す用紙にも上三坂が抜けていた。ツイートしているツイッターの内容からも上三坂が抜けていた。しかし、ホワイトボードに上三坂って書いてあったと、これはかなり矛盾があると思うんですね。なぜか上三坂って書いてあった写真がなぜ残っているかもちょっと私不思議なんですけども。写真があったから。そうすると、指示を出したのか出さなかったっていうのは、先ほど金子議員が言う、後々補償問題になった場合、これは重要なことなんですね。出したけども無線放送で抜け落ちたのか、それとも出さなかつたのか。このところはちょっとはつきりと今答弁してください。はつきりと。

○委員長 じゃあ、前回その答弁いただいているが、きょうは市長、本部長おりますから、この前はそういう答弁でうやむやだったんですね。指示はしたんだと。ところが実際はそれが放送されないっていうか、防災無線では上三坂のほうは入ってなかつたというふうな内容ですからね。その辺ですよ。それは指示をしたけど、どこの部分で抜けたかは定かではないみたいな話だ。この前ちょっと出ましたから。それをまたもう一回確認したいという。

○高杉市長 ですから、先ほど申し上げましたように、災害対策本部としては指示を出し、それをホワイトボードに記載をし、その記載をした後にもう一度確認をして、そして伝達をしておりますから。それは明確に言えると思います。

○委員長 今の話どうですか。今言われた。はいはい、中村委員。

○中村委員 遠藤委員が言っていることと市長が言っていること、順序が違う。

○委員長 逆。

○中村委員 うん。紙に書いてボードに書いたと言ったけど、違う。ボードを見て紙に書いていたんでしょって。そのボードっていつボードに書いてあったんですかって聞いているのよね。市長が今言っていること違う。指示に書いてボードに書いたって市長今言ったんだけど、そうじゃないよ。

○委員長 逆なんだ。

○中村委員 逆だよ。そのボードっていつ書いたんですかって、今遠藤議員は聞いています。

○高杉市長 ボードに記載するのには、全体の確認をした中でしか記載できませんから、それは当然言った中で記載をされています。すべての地区が。

○遠藤委員 そうすると、ですから、防災無線のほうで抜け落ちたというのは納得するんですよ。きっと伝達ミスがあったんだろうと。しかし、ツイッターでも抜けているというと、今度二重におかしな話になりますよね。ツイートしているんだから、こ

この情報を絶えず常総市のツイッターとして全市民にツイートしてるわけですよ、ここで。情報を聞いてね。そこからも抜け落ちたってことは、实际上三坂の指示は抜け落ちていたんじゃないですかってことなんです。防災無線のほうだけ抜け落ちていたというんであれば、これは指示書に書く伝達ミスであったということが言えるかも知れないんですけども、ツイッターの内容からも抜け落ちたってことは、実際災害対策本部で上三坂の指示が抜けていたんじゃないですかっていう質問なんです。

○高杉市長 ホワイトボードに記載することは、避難指示を出して、そして記載して、その上でまた確認をしてからでなければ、避難指示そのものが出来ませんから、それはきちんと出してあります。

○委員長 そういうやり取りの中で、やっぱりそういったことしか答弁がないということになりますから。そういうことなんですが、納得できないところがたくさんあるでしょう。それは。

○遠藤委員 ホワイトボードにいつ書いたかっていうのが定かじゃないんですよ。上三坂っていうのだけ上のほうに1個ぱっと書いてあって、それをいつ書いたかっていうのは、ホワイトボードに何時何分私が上三坂って書きましたっていう証拠ないですもんね。いつ書いたか。

○委員長 ないですね、それは。

○高杉市長 それはほかについてもね、それはそこまではわからない。

○遠藤委員 だから、ホワイトボードに書いてあったから指示を出しましたっていう理由には私はならないと思うんですよ。逆に言うと。そうすると、防災無線で抜け落ちた点、あとはツイッターでツイートされてなかった点、これもしっかりと今後検証していくかなくちゃならない。この点はね。あと、もう時間ないんで、先ほどの話題にまた戻ってしまうんですけど、若宮戸が決壊したときのシミュレーションの中で、市内のもう浸水するシミュレーションが来ていたっていうのは、委員長これは資料として請求したいと思います。

○委員長 はい、わかりました。

○遠藤委員 あともう一点ですね、その時点ではやはりさっき言ったように、災害対策本部長として市長がどれだけの想像力を働かすかっていうことによって、被害が未然に防げたように思うんですね。ひとつ、5時1分に全職員を招集をかけた、動員をかけた。何度も言いますけども、職員の車が全部水没しましたよね。逆に水没する場所に職員を動員したということは、どういうことになるかっていう想像力がひとつ欠落していたと。あと、市のいろいろな車80何台全部水没した。2時の段階で水没が予想されていたんであれば、小学校なりの高台に全部市の車を移動するっていう、そういう想像もできた。あとは何よりも市民に早急に、浸水する可能性があるっていうことを伝えるっていうこともしなければならなかつた。単純に私たち議員のレベルでもいろいろな想像力が發揮できるわけですね。この情報を見た段階で。災害対策本部長として、どのような想像力を働かせましたか。そのシミュレーションを見て。前回の検証委員会では、市民生活部長に災害対策本部であるこの市役所が水没するということを予測できましたかって言ったら、やはり予測できませんでしたとおっしゃいまし

た。災害対策本部長としては、どのような予測をされましたか、そのときに。

○委員長 はい、どうぞ。

○高杉市長 やはり水没するとまでは予測できませんでした。

○中村委員 いいですか、委員長。

○委員長 はい。

○中村委員 今遠藤委員が部長の答弁でと言った、私ひとつ、部長は上三坂が越水決壊するとは一切把握してなかったとおっしゃったんですけど、市長はどの時点で上三坂の越水を考えましたか。

○高杉市長 ですから、避難指示を出したのは10時何分だっけ。

○中村委員 13時8分。

○高杉市長 いやいや、10時15分でした。

○委員長 10時15分。うん。

○中村委員 どこに。10時15分。その抜け落ちた中三坂上と中三坂下に出したときに、やっと把握したんですか。

○高杉市長 だから、これは避難指示ですからね。これは強制的な命令です。指示というのは。ですから、この段階では明確に危険が差し迫っていましたから、指示を出したわけですから。

○中村委員 対策本部で一番騒いでいたのが上三坂なのに、何で抜けたんですかって、何回も私言っているけど、これはいいとして。

○高杉市長 ですから、10時15分ですね。

○中村委員 いいです。わかりました。出したのは13時8分ね。12時50分の上三坂堤防決壊というのは、ここにも本人がいらっしゃいますけど、私に「ぶっちゃぶれちゃった」という電話をくださった、土手の上に立っていて決壊した時間は12時44分58秒ですからね。電話で記録しているから。これはこれから12時45分に変更してください。市長、いい。

○委員長 はい。よろしいんですか。今中村議員が言われた内容で変更できるんですか。

○高杉市長 今の件については、12時44分と12時50分のことですよね。そのことですよね。そういうところは検討します。

○中村委員 5分違うよ。はい、いいです。

○遠藤委員 最後にもう一つ、再度確認しますね。国土交通省からの連絡、これ。これは来てなかつたんですよね。市には。これだけ絶対に確認したい。これは見てないんですよね。市長も災害対策本部は一切。というのは、ここの決壊って書いてある場所は若宮戸の場所ね。その下にバツがついているところにおいて、左岸20.25kが決壊した場合のシミュレーションって、送って来ているわけ。送ったと言っているわけ。20.25kは三坂なんですよ。三坂。若宮戸は既に決壊って書いてあって、もし20.25kが決壊した場合はこういうシミュレーションですよっていうのを送りましたよって国土交通省は言っているんだけども、今聞いたら受け取ってなかつたでしょ。だから、そこの食い違いはちょっとこれから調べなきゃならないですよ。検

証委員会で。だから、そのところは「もらっていなかった」でいいんですよね。先ほどのお話でね。

○委員長 資料がなかったと言っていましたね。いろいろね。

○金子委員 最後確認をしたい。すいません。

○委員長 はい、金子委員。

○金子委員 この前もそうだったんですか、この10時15分の上三坂、中三坂上、中三坂下に避難指示を出したというふうに、今回言い切っているわけじゃないですか。住民の方からしたら、出してないだろうと。もう初めて情報が耳に届いて避難指示を出したということになったとしたら、いろんな補償の面も含めて、ただここで避難指示を出しましたということで、結論としてこの資料には載っていますよと。市長としては、これは避難指示を出したということでいいんですか。それは確認したいです。

○高杉市長 ですから、市民の中に伝わっていなければ、これは本部として出したことにはなりませんから。

○金子委員 でしょ。

○高杉市長 それはそういうことです。

○金子委員 ということは、これは避難指示を出したというふうに断定して、この資料では書いてしまっている。現実はここでもしなったかも知れないけど、遠藤議員がおっしゃるように、ほんとにホワイトボードに書いていたのか、後付けで書いたのかどうか、ちょっとわからない部分ではある。これ不確かな部分ではあるから、本当にこの時点で、避難指示が対策本部で決議されたのかわからないからこそ、市民に避難指示が伝わってないとするならば、この資料にある上三坂に避難指示を出したっていうことに対しては、非常に市民のほうから見たら疑念を生じやすいと言いますか、出してないでしょと、はっきり言えば。それに対して先ほど市長はそういうようにおっしゃったと。ということでよろしいんですね。じゃあ、出してないと。

○高杉市長 ですから、市民に伝わっていなければ…。

○委員長 出したことにならないという話だよね。

○高杉市長 出したことになりませんから、それは私、確か9月12日の記者会見でそれは明確にその視点で言っているんです。

○中村委員 じゃあ、削除するんですか。

○委員長 だから、これは提出された資料にはありますからね。そういったことですが、だけど実際にはそういうこと伝わってないということは、じゃあ言ってないということになってしまっても、よろしいんだということですよね。聞いてないということであれば、それが正しいんだということですから。はい、大変時間的にちょっと<聞き取り不能>たいんですが。中村博美議員、最後に何か一言言ってください。

○中村委員 補償の問題だけを僕一人では判断できない、国と県なんて言うけど、そんなことないですよ。市長が権限もって、今聞いていたら何も市長が自分の権限でやったことは何一つないんでしようよ。対策本部で何かことが来たらこうして皆さんそれはどうですか、皆さんそれはどうですかって聞いている様子を私はずっと見ているんですけど、そうじゃなくて、市長が判断して行動を起こすことをやってもらいたい

と思ってます。補償に関しては。

○委員長 はい、わかりました。本部長としての役割として、やっぱり機敏にきちんと動いてもらいたかったというような話が最後にありました。大変時間が過ぎまして議論が尽きないんですが、その内容的なことでも納得のできないところがたくさん委員の皆さんまだおいでになります。今後また時間を取りながらこの辺の部分についても話を進めていきたいと思います。一応これで閉会をしたいんですが、委員の皆さんだけちょっとお待ちください。執行部のほうは大変ありがとうございました。ご苦労様でした。ちょっと今江連八間のほうから申し入れがあったんだそうです。だから、この申し入れの内容を皆さんに配布します。江連八間は前々回ですか、聞き取りをしてあります。これは4人の方がお見えになっていますし、常総市からも管理費ですか、600万からのお金が江連八間には支払われているということで、皆さんからいろいろこの前も江連八間にに対する質問があったわけありますが、今回江連八間のほうについては、議員の皆さんと委員の皆さんからの意見は、だけどどちらの江連八間のほう、私たちの内容の話はまだお聞きしていただいてありませんで、ぜひそのことに対して理解をしていただくためにも、お聞きいただきたいんだというようなことなんですよ。きょうのこの文章は。だから、これは今後いずれかの時間を取りまして全く無視しちゃうわけにはいかないというふうに。これはきょうなんですね、この文章が来たのは。

○倉金書記 きのうの夕方ですね。

○委員長 きのうの夕方。ああそうですか。そういったことでこの文章が入って来ていますんで、今後検証の結果を出すまでの期間はあります、これは早いうちにこの話を聞いておいたほうがよろしいですか。どうします。江連八間の問題ですよ、これ。

○金子委員 これはこの内容のお話を聞くっていうことになるんですか。

○委員長 だから瑕疵があつたっていう、管理者である改良区の大きな瑕疵ではないのかというようなことの意見がここに出てきていますよね。だから、これだけだからどうだかそれはわからないですが、とにかく私どもとすれば、私たちの意見は委員の皆さんに聞いていただいてないと。だから、できれば時間を取って少しいただきたいということですから。だから、時間はそんな取ることはないと思いますが。1時間くらいの時間は取らなきやならないというふうに思いますね。だから、これはどうですか。

○水野委員 座長、これね、ちょっと聞きたいんですが。これ今八間堀関係から來たとしても、結果的によく読んでないんですが、これ読んだとしてもおそらく稼働してなかつたとか事実であるし、今後どうするかの問題で、私やらやつても検証したり現場を見たりした結果を踏まえて、検証の結果を、補助金も出しているし、それをどうするか。今度はどういうふうに管理者をきちっと決めてやるのか。ちゃんと検証の結果を踏まえて注文つけたらいいと思うんですよね。

○委員長 ああ、そうですね。だから、そのことも含めてこちらからもそういった話がありますから、その中でこちらはこちらでそういう指導的なことも意見として出していただくのは結構だと思うんですが、とりあえずこのことが出てきていますから、これを取り上げて今後のどこかの時点で、この話も聞いてやる必要があると思うんですね。全く無視しちゃうわけにはいかないと思いますんで。そういったことで取り

上げたいと思いますが、よろしいですか。

○茂田委員 委員長。

○委員長 はい。

○茂田委員 これ、来たってこれしか言わないですよ。これ、答えたもん。時間の無駄でしょうよ。もうアンサーで答え出しているんだもん。これと同じでしょうよ。

○委員長 いいでしょうよ。これだけの話であれば、この文章どおりで結構じゃないですかということになりますが、話を聞いてくださいっていうことは…。

○茂田委員 言ってきたの。

○委員長 そういう話じゃないでしょう。だから、これ出してきたんでしょ。

○関委員 言っていない、言ってない。

○委員長 言っていない。

○茂田委員 言っていないでしょう。

○倉金書記 こちらはですね、今までの検証委員会でのやり取りの中で、江連八間さんのはうで、委員の皆さんにはちょっと誤解があつては困るところがあるということで、こちらを送っていただいた経緯なんですね。

○委員長 私が直接この文章は今拝見することにしますが、その具体的なことはどういった部分なんだか、その辺の話は皆さんが来て、八間からうちのほうに直接話をしないとわからないことなんですかということを確認しますよ。

○茂田委員 答え出しているんだもん。だって。来る必要ないでしょう。

○委員長 じゃあ、どうですか。全く無視することになっちゃってもまずいなと思ったもんですから。

○茂田委員 いや、無視じゃなくても答え出しているでしょう。

○委員長 いや、だからこの答えだけだったら、だって茂田君ね、それはないと思いますよ。

○茂田委員 だって、来たってこれ読むだけでしょうよ。

○委員長 だって、それだったらこの文章だけだったら、聞く必要ないですよということ私言いますよ。それは。

○茂田委員 そうでしょう。それしかないでしょうよ。

○委員長 だから、そうじゃないんであれば、やっぱり全く聞かないわけにもいかないんじゃないのかなというふうに思ったもんですから。

○茂田委員 委員長。前2回呼んだって、のらりくらり、のらりくらりでしょうよ。のらりくらりで足らないのがこのアンサーなんですよ。同じだよ、呼んだって。

○委員長 それだったら、そういうふうにしますか。全く聞く必要ないですね。

○中村委員 ちゃんと読めばいいんじゃないですか。しっかり読みます。

○委員長 読めばいいという意味ですか。

○中村委員 しっかり見れば、読めばいい。

○茂田委員 もう答えは書いてきているんだもん。

○委員長 ああ、そうですか。私は聞く必要ないですね。江連八間に対してこういつた文章が来ていますがということは。

○茂田委員 時間の無駄だよ。来たって同じだもん。肝心なこと言わないもん。

○中村委員 しっかり読みましょう。

○委員長 だけどね、ここに書いてある、機械はいつ動かしたかなんていう話はこの間聞いていますよ。これは聞いているよ。聞いているけど、これは平成4年以降ではいつ動かしましたかっていう話ですよね。だけどこれは平成4年か5年に動かしたことがありますよということですよ。その後は動かしたのかどうかっていうのはわからないだけの話でね。これはやっぱり今回改めて市の管理運営費を市が出していますよ。市が出していることに対して、管理運営というずばりそのものを的確にやってなかつたということを認める以外にはないんですよね。これは機械が動かなかったとかね。管理がされてないからそういうことになったんだとかということになるわけですから。じゃあ、この件についてはまだ…。

○水野委員 いいですか、委員長。この件については、みんな検証委員会で場所も見せてもらったり、いろいろだいたい私もわかりましたけども、今度は現実に常総市としても補助出してるんですから、稼働して責任者をだれとか、補助はいくらぐらいでやるとか、きっちり検証委員会としての結果を踏まえて、注文つけたらいいといいでしょうよ。それが一番だと思うんですよね。それでお願いいたします。

○委員長 それは議会の今度は予算の段階でその問題出てきますからね。当然ね。来ても同じだという話になったから、それは一部そう言えばそういう話になるし、捉え方いろいろありますから、この次の会議、日程よ。今の対策本部長の話は、皆さんも理解得られないところたくさんあったと思いますよね。これは確かにどうも不思議だなんていう話になってきちゃうどこもたくさんありますから。ですが、この次は日程決めてないですよね。

○茂田委員 河川局いつ呼んでくれるんですか。河川局。あの若宮戸の件。

○委員長 どういうふうにしますか、順序は。だけど、あまりずっとこればかり調査ばかりしていて、内容的なことをつくっていかなければ…。

○茂田委員 若宮戸は一回も調査していないでしょ。検証。

○委員長 若宮戸は現場行っただけの話で。

○茂田委員 いや、違う。河川局から検証していないでしょっていう話。

○委員長 それは呼んでないよ。

○茂田委員 だから呼ばなくちゃだめでしょう。日にち決めよう。向こうの都合もあるから。委員長、それ任せよ。いつ呼ぶか。

○委員長 10日でよろしいですか。<「はい。」の声> 10日、10時。はい。

○安田係長 案件は何ですか。

○委員長 案件は、やっぱり今までやってきたことに対して、まとめもやらなきゃならないけど、今は検証していないとか、下館河川事務所の意見を聞く話でしょ。今の話は。うん。

○茂田委員 いきなり10日って言っても向こうもあるから、10とか18とか、いつ都合がいいかって聞いて。

○安田係長 こちらで日にちは決めていただいても、例えば10日に来てください

て言っても、向こうの都合がございますんで、10日で予定をしているんですが、向うでいかがですかと。だめであれば、国交省でこちらのほうに来ていただける日にちはいつなんでしょうかと聞いて、それにあわせてもらわないと。

○中村委員 そうじやなくて、10日と15日って決めてどっちかに来てもらうっていうほうがいいんじゃないの。

○安田係長 向うの都合があるじゃないですか。

○中村委員 でも、2つ出しておいてだめと言われば、また考えるしかないけど、好きな日と言ったら、今度皆さん出られなかつたらどうするの。国交省のいい日に来てって決めちゃって、みんなが出られなかつたらどうするの。

○委員長 いや、それはどうするんだと言われたら、それは困る話だよね。10日と15日という話であればどちらかに都合がつくかどうか、それを確認してもらえばいいよ。どっちも10時だ。内容的なことは、例の八間堀の水海道の水門だよね。もう一つは、今言った若宮戸の話。

○寺田委員 遠藤さんもさっき言った三坂地区のシミュレーションですよね、まだそのほかにも、ほかのところの決壊のシミュレーションもあるかも知れないですよね。三坂地区的シミュレーションが決壊したときに出したのか、それともその前からあつたのか。その前からいろいろなシミュレーションがあるんであれば、常総市に関する決壊のシミュレーション…。

○委員長 決壊の前のシミュレーションだもんね。

○寺田委員 いやいや、だからそれはわからないけど。あれば、それもぜひほしいですね。

○遠藤委員 それは委員長にお願いした資料。

○委員長 今の、事務局の方ね、悪いですが、安全安心課とね、市民部長が来てますが、さっきのシミュレーション、今の時点では、「ありません」の話なんだよね。この時点では。だから、ありませんじゃなくて、どこか確認しはぐつたかなんかの話なのかどうなのか。

○安田係長 先ほどの安全安心課長の答弁では、そういう連絡はなかったけれども、そういうやつがホームページ上に載っているからっていう話はされたとおっしゃっていましたよね。

○委員長 うんうん。そこまでの話なんだよね。だから、資料を提出しなさいの話は。

○遠藤委員 2時6分の資料を提出してもらいたいです。2時6分。

○委員長 2時6分ね。ホットラインのやつね。

○寺田委員 ついでに、出ればその後のものもほしいです。あれば。決壊した後のシミュレーションも出ているから。

○委員長 一応そういったことで、相手方の都合もありますから、こちらがよくても相手のほうの都合がつかないかどうかは、それはお任せいただいて、会議を進めていきたいというふうに思いますんで。今決めた日にちは実行していきたいというふうに思いますから。その内容的なことは部分的にわかりません。この排水機場の対応についての話は、私何となくちょっと確認してみたいと思いますんで、お任せください。

大変どうも長時間ありがとうございました。

閉会 12時11分